

心

の

影

心の影に情の眞實はあつても事實の眞實はない。此の集の中の二三の歌が世間の一部から事實の記載であるかのやうに非難せられたのを私はかなしむ。

窓の外は、たゞ眞つくらな夏夜の八時すぎ。

雨のざんざんとそとへ音、その闇の中から

ひらりと抜けて来た一羽の蝶がわびしく照す電燈の笠に、

すがりつき、すがりつき濡れた羽を翫はす、

やるせない夏の夜の八時すぎ。

○ 通り雨、通り雨、

戀の邪魔して通る雨、

それで思ひ切られる仲ちやなし、晴れて行け、晴れて行け

跡には濡れた青桐の夕日の蔭のつばくらめ。

○ 部屋の隅に据ゑた石膏像、

その上からふはりと

白い薄絹が覆うてある、薄絹の襞のいろく、

青い瓦斯の光がそれを傳つて流れたり流んだり、

あるか無いかの夜風が窓から手を出してなぶる、

柔かな襷の擦れ、かすかに採める光線の戯れ、

音もない書齋の夜の心。

○ 眞つ白い綿雲と青い空とを遮つて

まがつみのやうに垂れ下つた灰色雲、ちつと流んで動かす、

下には憂鬱の森が黒く、夏の薄目に蒸されてゐる

森から吐き出す重い息は鈍い空気に流れ込んで私の心臓を壓して来る、

あゝ眞夏の午の沈黙、いつまで續く沈黙。

○ どんよりとした薄曇り、霧に包まれた日白の森を

今日も夢のやうに見てゐる。

森の輪郭を破つて、一本立つた煙突、

つき／＼に吐き出す煙のいつまでも盡きぬ想ひ。

○ 名も知らぬ信越線の停車場に小娘ひとり立つ雨の暮

河原あれて月見草咲く夕ぐれを汽車の窓より見る漂泊の人

上野を去る數驛にして眼に涙あり何とも知らぬ今日の心よ

頬を打つ大粒の雨ひややかに我が魂を貫くと見し。

青田煙り遠山黒く限りなく雨に籠りて憂
き日暮れ行く

旅にありし一筋町の夜を想ふたゞ赤かり
し祭禮の灯よ

なつかしき城下町なり衰へし軒にたゞ
しくあかり掛けたる

廢滅の香ひを秘めて古濠に溜みたる水の
ゆるく漂ふ

瘦烟に雑木林のつゞきたる其蔭に立つ類
の蒼き人

旅人の秋に感じてうなだれし襟元さむし
信濃路の風

桔梗咲き女郎花咲き百合咲いて空淺黄
なる信濃高原

或時は二十の心或時は四十の心われ狂
ほしく

いたづらに此世を過すまでもなし我が
身亡びよ天地崩れよ

ともすればかたくななりし我心四十二
にして微塵となりしか

いつまでも斯くてあらんと願ふなり敗れ
たるわれ傷つける我

われ強しわれ大なりと思ふ時我が詩まこ
との詩を成さざりき

くれなゐに黄金に燃えて水色にさめては
またも燃ゆる君かな

その花に香ありあらずと争ひて君まづ折
りし河原撫子

かりそめに結びし紙の誓ひにも木をかけ
たり住吉の宮

住吉の塔の東の窓に倚り人の世狭しと君
かこちしか

住吉の赤き社と白き砂君がバラッル水色
にして

むらさきの空いつとなく薄れ来て月しろ
じろの秋の朝たち

長岡のいでゆの旅よごさんなれ江馬の小
四郎天野遠景

こしかたの三十年は長かりき沙漠を行き
てオアシスを見ず

秋風のさらく渡りばつた飛ぶ野にひと
り立てば人の戀しき

ペレアスがメリサンド戀ふそもくの不
可思議を思ひ思ひ寝たる夜

セリセット死にぬ衰れの妻なれど妻に代
へたる戀もたふとし

こしかたの暮はとざたり美しき夢のはじ
めのモンナヴンナよ